

はじめに

中川 裕

千葉大学地域研究センター主催研究プロジェクト「言語と地域社会」も、今年度で4年目を迎え、その(2)を終了することとなった。本プロジェクトは、言語を社会生活で果たす機能という側面からとらえ、言語行動と社会構造との関係を探ろうという試みである。前回2016年に刊行した「言語と地域社会」の報告書(第302集)では、サジーワニー・ディサーナーヤカ氏、ボルジギン・ムンクバト氏、エシーバ・ムハンマド氏が、それぞれスリランカ、中国内モンゴル、エジプトの言語使用状況について研究報告を行い、それらの地域社会における人々の生活と言語の関わりについて、本質的な問題を浮き彫りにした。

その後、ディサーナーヤカ氏は千葉県山武市の職員として、2020年の東京オリンピックに向け、スリランカと日本の友好関係の推進運動のために、山武市の子供たちにスリランカの文化を知らせる広報活動を行う仕事に就き、またムンクバト氏は千葉市立小中台小学校の教員として、外国人児童に日本語を教えるという、これもまた日本の地域社会に密着した言語教育活動に従事している。「言語と地域社会」というプロジェクトのメンバーが、そのプロジェクト名の示す通り、単なる机上の研究にとどまるのではなく、このように実践活動に結びついた活動を行っているということは、このプロジェクトの存在意義に関わることであり、大変喜ばしいことである。

今回の「言語と地域社会(2)」の報告書では、ムンクバト氏、エシーバ氏に加え、人文公共学府博士前期課程の渡邊香織氏が参加して、在日朝鮮人学校の朝鮮語の使用状況をドキュメンタリー映画から探るという試みを行っており、さらに本プロジェクトの対象範囲を広げることに貢献してくれている。ムンクバト氏も小中台小学校での活動をもとにした報告を本報告書で行っており、今回は日本という地域が多言語社会であることを明確に知らしめる論集となった。

本プロジェクト自体は、おもに地域研究センターの定例会において、研究報告という形で進められてきたものであるが、それとは別に、中川は今年度人文公共学府の授業である「ユーラシア言語論Ⅰ」「ユーラシア言語論演習Ⅰ」において、フロリアン・クルマス氏の労作である『ことばの経済学』(1993、大修館書店)をテキストとして、少数言語の維持・復興問題を経済という観点からとりあげ、実践可能でありかつ実効性のある言語復興運動という問題について考えてきた。中川自身がアイヌ語に関してそのような活動に取り組んでおり、言語学的研究が実際の社会問題の解決にいかにか寄与できるかということが、問われている時代であることを自覚している。

本報告書は、千葉大学地域研究センターがその研究教育活動を通じて、そのような問題意識が現代において重要であるというメッセージの発信であり、今後もプロジェクトを継

続して人材の育成に向けて邁進していきたい。

なお、今回の報告書は、ムハンマド・エシーバ氏が報告者としてだけでなく、編集者として労をとってくれた。

(なかがわ ひろし・人文公共学府)